

現代普遍論争の諸相

——普遍者・クラス・トロープ——

西條玲奈

1. 序論

プラトンとアリストテレスは共に人間である。しかし、なぜ彼らが同じ人間だといえるのだろう。私の眼前にあるコーヒーカップとゆで卵の殻は共に白い。では全く別のこの二つの事物が同じように白いといえるのはどうしてか。このように複数の異なる個体が外見上同じ⁽¹⁾性質をもつことをムーア的事実(cf. Lewis, 1983, p. 352)⁽²⁾と呼ぶことにしよう。ムーア的事実を説明することは分析形而上学⁽³⁾における「普遍論争」(the Problem of Universals)の主題である。

ムーア的事実の説明という主題への応答の仕方は、性質一般の存在論的身分を扱う理論によって異なる。本稿は、20世紀以降登場した性質の理論として、普遍者実在論⁽⁴⁾、クラス唯名論、トロープ唯名論という主要な三種類の立場を概観するものである。その際、これらの理論の違いや特徴を明示するため、特に以下の四つの観点から説明を試みたい。(1)性質の存在論的身分。各理論は性質をどのような存在者とみなすのかを説明する。(2)性質とその担い手の関係。性質はさまざまな対象に帰属されるものだが、この所有関係をどのように説明するか。(3)ムーア的事実。上記で言及したように、外見上同じ性質を異なる個体をもつのはなぜなのかを説明する。(4)性質の同定。ある性質と別の性質が違う性質と呼べるのはなぜなのか。一つの性質であるための条件とはどのようなものかを説明する。これら四つの論点に加え、各理論の抱える問題点も併せて言及したい。

2. 普遍者実在論

2.1 普遍者実在論の特徴(I)——存在論的身分と個体との関係

普遍者実在論とは、個体が有する様々な性質を普遍者という、個体とは別の種類の存在者とみなす立場である。20世紀後半の代表的な普遍者実在論には、D. M. アームストロングの理論が挙げられる(cf. Armstrong, 1978a, 1978b)。普遍者実在論は、たとえば、プラトンという個体と、彼が所有する人間であるという性質は、それぞれ存在論的に異なるカテゴリーに属すると考える⁽⁵⁾。普遍者は複数の異なる個体を質的に類似させる固有の役割をもつ存在者とされ、プラトンとアリストテレスが共に人間であるのは、それぞれの個体に、

人間であるという同一の普遍者が現前しているからである。普遍者实在論において、プラトンが人間という性質をもつとは、人間であるという普遍者の事例となることにほかならない。このように様々な個体は普遍者と例化関係にあり、各個体のもつ性質は厳密に同一ということになる。

ただし、普遍者实在論を採用するにしても、普遍者を抽象的対象の領域に存在するとみなすか、具体的対象とみなすかで見解が分かれる。ここでは簡単に、ある対象が具体的であるとは、それが時空内に位置をもつことだとしよう。それ以外の場合、その対象は抽象的であるとしよう。この意味で普遍者を抽象的なものとみなす考えはしばしば見受けられる⁽⁶⁾。一方、アームストロングは普遍者を時空内に位置する具体的存在者であり物理学の発見の対象だと明言する(cf. Armstrong, 1989, p. 87)。これは普遍者の事例として、質量、電荷、延長、持続、時空間隔などが挙げられることから理解されるだろう。普遍者は、経験世界とは別の領域に存在するのではなく、個体各々の中に存在していることになる(cf. *ibid.*)。このように普遍者を経験的発見の対象とみなすことから、彼は自らの立場を「ア・ポステリオリな实在論」と称し、経験的世界から超越した領域に存在する普遍者を認める立場と区別する(cf. Armstrong, 1978a, chap. 7)。こうした区別を念頭におけば、個体は具体的なもののだが、普遍者は抽象的だという特徴づけは常に採用されるものではなく、そこに選択の余地があるといつてよい。

2.2 普遍者实在論の特徴(II)——ムーア的事実の説明と性質の同定

普遍者实在論は、複数の異なる事物が外見上同じ性質を有するというムーア的事実をどのように説明するのか。ここで「外見上」という但し書きをする理由を述べておこう。なぜなら、任意の性質について、その性質を共有することが、複数の異なる個体のあいだの質的な類似性に貢献するとは限らないからである。確かに人間であるという性質をプラトンとアリストテレスが共有するならば、両者は質的に同じといえる。だが、同様に、たとえば人間ではないという否定的性質をブケファロスとサモトラケのニケ像が共有するがゆえに、何かしら質的な点で両者が同じである、とはいいいにくい。「外見上同じ性質を共有する」というムーア的事実は、後者のように質的類似性がすぐには認められないケースを除外するものである。もちろん前者と後者のケースに区別を設ける必要はないという立場もあってよい。しかし本稿は個体同士の質的類似性に貢献するかどうかという区別が十分理解されると前提した上で説明を進めたい。

対象aとbについて成立するムーア的事実を「aとbが外見上同じ性質Pをもつ」と表現することにし、普遍者实在論による説明を以下のように記そう。

(U) aとbが外見上同じ性質Pをもつ $\Leftrightarrow$ aとbは同一の普遍者Pの事例である。

普遍者实在論において、ムーアの事実に寄与する性質とはそれに対応する普遍者のことである。この説明の特徴は、複数の個体が共有する性質は数的に同一だという点にある。先に人間ではないという否定的性質に言及したが、アームストロングは否定的性質や選言的性質といった複合的性質の存在を否定する(cf. Armstrong, 1978b, pp. 19-29)。確かにブケファロスを「人間ではない」と述定することはできるが、それはこの述語に対応する性質が存在することを保証するものではない。普遍者と性質は一対一対応するが、述語と普遍者はそうではないのである。したがって、普遍者实在論では述語と性質もまた一対一対応しない。述語(言語的存在者)から普遍者が自動的に出てくるのではないのである(cf. Armstrong, 1989, p. 84)⁽⁷⁾。

ただし、否定的性質や選言的性質は恣意的に性質の身分を剥奪されるのではなく、それは普遍者实在論が掲げる性質の同定条件に由来する。ここで性質を同定するとは、何かが性質の一つとして資格を得るための条件を提示することである。Armstrong (1978b)によれば、性質である普遍者を同定するのは、当該の普遍者がその事例となる個体にどのような因果的力を付与するかにかかっている。たとえば、5gの質量をもつという性質は、特定の仕方で天秤に作用する力をもつ(cf. ibid., p. 82)。この性質をもつどの個体も、規則的に同様の因果的力をもつだろう。こうした規則性をもつ作用は自然法則として経験的に発見されるものだ。それゆえ「普遍者はア・ポステリオリに同定されるほかない」(Armstrong, 1978a, p. 133)ものなのである。

これまで普遍者实在論の特徴を(U1)性質の存在論的身分、(U2)性質とその担い手の関係、(U3)ムーアの事実に説明、(U4)性質の同定条件の観点から述べてきたが、これらを次のように要約できよう。

(U1) 性質は普遍者というその事例に共通の特徴を付与できる存在者であり、個体とは区別される。

(U2) 個体は性質と例化関係をもつ。

(U3) aとbが外見上同じ性質Pをもつ $\Leftrightarrow$ aとbは厳密に同一な普遍者Pの事例である。

(U4) 普遍者と性質は一対一対応し、個体間にどのような因果的力をもたらすかによって決定される。

2.3 普遍者实在論の問題点——普遍者の不可解さ

対象同士の質的な類似性というムーア的事実を説明するために、普遍者实在論はその事例となる複数の個体に同一の特徴を帰属させる存在者、すなわち普遍者を想定する。普遍者实在論が敬遠される理由の一つは、余剰の存在者を想定すべきではないという存在論的儉約の精神(cf. Quine, 1967, p. 4)に反するためである。この精神に共感するならば、できるだけ少ない存在者でムーア的事実を説明できると考える立場が好まれるだろう。

しかし、存在論的儉約はあくまで理論選択の一つの方針に過ぎず、その採用を強制して普遍者实在論を退けるのは独断的ですらある。むしろ普遍者实在論が忌避されるのは、その存在そのものがもつ奇妙な特徴のゆえである。プラトンとアリストテレスは、どちらも人間であるという同一の普遍者の事例であった。ということは、一つの普遍者が複数の場所に現れることになる。だが、一つしかないものがどうして複数でありうるのか。さらに、普遍者には認識論的にも不可解さがつきまとう。われわれは日常的に、電車で隣席となった人物を認知することはあっても、特定の誰でもない人間の普遍者を認知する経験とはどのようなことなのか理解しがたい。確かに、こうした特徴に奇妙さが感じられるとしても、それは普遍者实在論がそれ自体不整合であることを意味しない。だが不整合が生じなければ特定の理論を拒絶してならないのか。仮に、普遍者という新たな種類の存在者を措定しなくとも性質について同様の説明能力を有する理論があるならば、そちらをより好ましいと判断してよい。

3. クラス唯名論

3.1 クラス唯名論の特徴——自然的性質を伴うクラス唯名論

普遍者实在論に対し、唯名論の特徴は、性質を個体から区別されるカテゴリーに属した存在者とみなさない点にある。唯名論には複数のバリエーションがあるが、クラス唯名論は性質を対象のクラスと同一視する立場である⁽⁸⁾。クラスとは個体の集まりでありそれ以外ではない。たとえば、人間であるという性質は人間である全ての個体のクラスと同じである。アリストテレスが人間であることは、アリストテレスが人間であるもののクラスの成員ということになる。これを踏まえクラス唯名論ではムーア的事実が以下のように理解される。

(C) aとbが外見上同じ性質Pをもつ $\Leftrightarrow$ aとbは共にPであるもののクラスの成員である。

しかし、クラスとは対象の集まりであって、普遍者のように複数の異なる個体に同じ特徴を所有させる力をもつ存在者としては想定されない。Pであるもののクラスとは、その全ての成員が性質Pをもつようなクラスにほかならない。そうはいっても、これは循環であって何の分析も与えないものだ。なぜこれでムーア的事実を説明したことになるのか。代表的なクラス唯名論者であるD. ルイスはこうした疑念に応答し、ムーア的事実を原始的でそれ以上分析されないとみなす(cf. Lewis (1983), p. 352)。特定の概念を原始的とみなすことはその概念について説明を放棄することではない。何かを分析するとはより基礎的な考えに当該の概念を翻訳ないし還元することだが、何かを説明することには、それが果たす役割や他の概念との関係を示すことも含まれるからである。ルイスはムーア的事実を構成する性質を、クラスの中でも自然的性質と呼ばれる特殊なクラスとして想定するのである。

自然的性質とはどのようなクラスなのか。クラス唯名論は性質とクラスを同一視する立場であった。たとえば、全ての人間であるものからなるクラスも、人間ではないものからなるクラスも、プラトンの髭またはビッグ・ベンまたは全ての丸いものからなるクラスも、いずれも性質として認められることになる。このような否定的性質や選言的性質が認められることは一見奇妙だが、決してこの理論の欠陥を示すものではない。任意の述語にその意味論的値を提供することができる点では、こうした性質を許容することにも有用性が見出せるからである。クラス唯名論では任意の述語に対応する膨大な数な性質が認められる。しかし全ての性質が等しい身分にあるのではない。性質の中でも以下のように素描される性質は「自然的性質」と呼ばれ、特権的なものとされる。

それら〔自然的性質〕はその共有により質的類似性が生み出され、実在の結合部を切り分けるものであり、内在的で、はっきりと特定されている。自然的性質の事例の集合は、事実完全に斉一であって、これさえあれば完全に、無駄なく事物を特徴づけることができる。(Lewis, 1986, p. 60)

いわば、自然的性質とは実在のあり方を積極的に規定するものである。ここでも言及される質的類似性も含め、自然的性質の役割は以下の三点⁽⁹⁾に要約できる。

- (a) 任意の自然的性質を共有する個体は質的に類似する(cf. Lewis, 1983, pp. -355-356)。
- (b) 個体が自然的性質をもつことは特定の因果的力をもつ(cf. *ibid.*, p. 365)。
- (c) 自然的性質の中には実在の基礎的な構成要素となるものがある。基礎的な構成要素となる性質は特に、完全な自然的性質と呼ばれる(cf. Lewis, 1984, p. 228)。

(c)に関連して付言すると、性質の自然性には程度が認められる。世界の基礎的構成要素のみが自然的性質なのではない。任意の性質の自然性の程度は、もっとも自然性の度合いが大きい完全な自然的性質からの「定義可能性の鎖」(ibid.)の長さによって決定するとされる。ある性質が完全な自然的性質であるかどうかは無条件に決まるが、自然的性質であるかどうかは、どのような性質と比較するかに相対的である。

以上のように、ムーアの事実に寄与する性質の役割を踏まえると、(C)は次のように書き換えることができる。

(C)' aとbが外見上同じ性質Pをもつ $\Leftrightarrow$ aとbは共に、Pであるという自然的クラスの成員である。

アームストロングの普遍者同様、完全な自然的性質のリストを作る役割をルイスは物理学に委ねている(cf. ibid.)。ルイスの自然的性質を伴うクラス唯名論の場合、完全な自然的性質とは実在する世界の部分であり、経験的に発見されるものである。

以上を踏まえて、クラス唯名論の特徴について、(C1)性質の存在論的身分、(C2)性質とその担い手の関係、(C3)ムーアの事実の説明、(C4)性質の同定条件の観点から要約しよう。

(C1) 性質はクラスと同一であり、対象の集まりである。

(C2) 個体と性質のあいだには成員関係が成立する。

(C3) aとbが外見上同じ性質Pをもつ $\Leftrightarrow$ aとbは共に、Pであるという自然的クラスの成員である。

(C4) 任意のクラスが性質となる。ただし膨大な性質は全て等しいものではなく原始的な自然性の概念によって区別される。

3.2 クラス唯名論の問題点——必然的に共外延的なクラスの問題

クラス唯名論の問題点として指摘される問題に、共外延的な性質を区別できないというものがある(cf. Armstrong, 1989, pp. 25-26)。著名な事例をあげると、クラス唯名論に従うなら、「腎臓をもつ」と「心臓をもつ」という性質は、共に同じ個体を成員とするクラス、すなわち外延が等しい。外延の等しいクラスは同一のクラスであるとするなら、両者は同じ性質ということになる。だが「腎臓をもつ」と「心臓をもつ」は重要な違いがある性質ではないのだろうか。

共外延的な性質の問題への対処法の一つは、様相実在論を採用することである(cf. Lewis, 1986, pp. 55-56)。様相実在論に従えば、可能者からなる全ての可能世界は等しく存在している。腎臓をもつが心臓をもたない個体や腎臓をもたないが心臓をもつ個体はわれわれの世界にはおそらく存在しないが、別の世界には存在する。「腎臓をもつ」や「心臓をもつ」という性質を構成する個体の範囲をわれわれの世界に制限しなければ、二つのクラスの成員は同じではないのだ。全ての世界の個体を射程に入れるならば、腎臓をもつもののクラスと心臓をもつもののクラスの外延は異なるのである。

しかし様相実在論を採用しても必然的に共外延的な性質を区別することはできない。性質が必然的に共外延的であるとは、全ての可能世界を通じて、当該の性質のクラスが同一の成員をもつことである。多くの場合、必然的に共外延的ならばそれらの性質は同一とみなせるかもしれない。しかし、反例として引き合いに出されるのは、「三つの角をもつ平面図形」と「三辺をもつ平面図形」である (cf. Armstrong, 1989, p. 26)。これらは必然的に共外延的であるが違う性質である。クラスの成員となる個体において差異がないとすると、クラス唯名論では両者を区別することができなくなるのである⁽¹⁰⁾。

4. トロープ唯名論

4.1 トロープ唯名論の特徴——個別的性質としてのトロープ

唯名論の中でもう一つの有力な立場は、Williams(1953)やCampbell(1997)などで論じられるトロープ唯名論である。クラス唯名論同様この立場が唯名論と呼ばれるのは、個体とは存在論的に異なる普遍者という存在者を否定するからである。トロープ唯名論によれば、性質とは個体と異なる種類の存在者なのではなく、あくまでプラトンやコーヒーカップといった各々の個体を構成する個別的な部分である。たとえばコーヒーカップの白さとゆで卵の殻の白さは異なる個体を構成する異なる部分になる。個体を構成する個別的な部分がトロープと呼ばれる(cf. Williams, 1953, p. 7)。トロープとされる個体の部分には、時空的位置を容易に指定できるものと困難なものがどちらもある。たとえば、プラトンのひげは彼の身体の部分であり時空的位置の指定が容易であるが、彼の体重や賢さという徳などの性質の場合、それらを個体の特定の領域として指定するのは困難だろう。だが、ひげをもつのも、特定の体重であるのも、賢いというのも全て一つの個体に帰属される性質であり、いずれも同等にトロープである。D. C. ウィリアムズはこうした意味で、トロープを「抽象的個体」(ibid., p. 7)とみなし、トロープの和は単一のトロープよりもその具体性の程度が増すものとみなす⁽¹¹⁾。一般に個体は具体的な対象とみなされるが、トロープは普遍者ではなく個体であり、かつ抽象的なものとされるのである。

それでは、性質をトロープとみなすこの立場は、個体間の質的類似性というムーア的事実をどのように説明するのか。これを説明するためには、クラス唯名論同様、ムーア的事実を原始的とみなすか、あるいは、以下のようにPトロープそれぞれにおいて互いに類似性関係が成立するとみなすという二つの方針がある(cf. *ibid.*, p.9)。

(T) aとbが外見上同じ性質Pをもつ $\Leftrightarrow$ aを構成する P_a とbを構成する P_b は共にPトロープであり、互いに類似性関係が成り立つ。

ウィリアムズのトロープ唯名論では、これらPトロープ同士の類似性は普遍者に基づくものとはされない。彼はトロープを世界の最も基礎的な存在者として以下のように述べる。

実体や普遍者はトロープから「構成」されうるもので、研究目的でわれわれが呼びかけるのは、[トロープからなる]全体の方である。しかし、トロープは実体や普遍者からは「構成」されえず、哲学や科学や常識がそれなしでは済ませられない多種多様な存在者の項目を与えるのに適している。(ibid., p. 17)

とすれば、 P_a と P_b という二つのPトロープのあいだに成立している類似性関係もまた、類似性トロープのはずであろう。たとえトロープのあいだの類似性関係を類似性普遍者の事例だとみなすにせよ、その普遍者はトロープから構成されるからである。

同じ唯名論でも、トロープ唯名論とクラス唯名論では個体と性質の関係が異なる。トロープは個体を構成する部分であり、トロープ唯名論では性質が個体を構成していることになる。対してクラス唯名論は、性質が個体の集まりであり、個体が性質を構成することになる。トロープ唯名論は、このコーヒーカップの白さや卵の殻の白さといった個別的性質を独立した存在者として認めるが、クラス唯名論は、個体とクラスを存在者として認める立場になるのだ。

以上よりトロープ唯名論の特徴について、(T1)性質の存在論的身分、(T2)性質とその担い手の関係、(T3)ムーア的事実の説明、(T4)性質の同定条件の観点から要約しよう。

(T1) 性質は、抽象的な個体であるトロープである。性質の担い手はトロープから構成される。

(T2) aとbが外見上同じ性質Pをもつ $\Leftrightarrow$ aの構成する P_a とbの構成する P_b は共にPトロープであり、互いの間に類似性関係が成り立つ。

- (T3) 対象と性質のあいだには、対象は性質から構成されるという全体部分関係が成立する。
 (T4) 性質の区別はトロープの集まりの成員同士が正確に類似しているによってなされる。

4.2 トロープ唯名論の問題点——類似性の無限後退とトロープの不可解さ

トロープ唯名論は、クラス唯名論のように必然的に共外延的な性質の問題に悩まされることはない。クラスの区別はその成員となる対象によってなされるが、トロープはそのようなことはない。同一の時空的位置に異なる複数の具体的個体は存在し得ないため、クラス唯名論の場合外延による区別が意味をなすが、トロープは、時空的位置関係を定め難い要素をも許容する抽象的存在者だからである。

しかしながら、トロープ唯名論に全く問題が生じないのではない。ムーア的事実を互いに類似したトロープによって説明し、かつトロープを基礎的な存在者とみなす場合、トロープ唯名論は無限後退に陥ってしまう(cf. Daly, 1997, pp. 148-153)。たとえば、色において互いに正確に類似したトロープ P_a 、 P_b 、 P_c を想定しよう。トロープの対である P_a と P_b のあいだには色の正確な類似性関係 R_1 が成立しており、異なる対である P_a と P_c のあいだには類似性関係 R_2 が、 P_b と P_c のあいだには類似性関係 R_3 成立している。トロープを基礎的存在者と考え、全てはトロープから構成されると考えるなら、 R_1 、 R_2 、 R_3 はトロープのはずである。これら R_1 、 R_2 、 R_3 からなる対 R_1 と R_2 、 R_2 と R_3 、 R_1 と R_3 のあいだには、色において正確に類似している二つのもののあいだにある正確な類似性関係 R_4 、 R_5 、 R_6 が成立する。これらもまた新たなトロープでありその間にも類似性関係が成立していることになる。したがって、繰り返し新たな類似性関係のトロープが要請されてしまい、無限後退に陥る⁽¹²⁾。

では、正確に類似したトロープによってムーア的事実を分析するという選択肢を断念すれば、トロープ唯名論は何の問題も抱えない理論なのか。そうではない。トロープ唯名論にとって固有の問題があるとすれば、それはトロープそのものの不可解さである。それはトロープ唯名論が存在を否定する普遍者の不可解さに劣らない。トロープは、抽象的なものでありながら、具体的な個体を構成する部分となるのだった。だが、どうして抽象的なものの和が具体的なものになるのか。加えて、われわれ認識主体がブケファロスやアリストテレスといった個体を知覚することはありふれているが、普遍者同様、馬トロープや人間トロープをどのように知るのは直ちに了解されるものではない。もちろんトロープ唯名論は、ただトロープとはそもそもこうした特徴をもつ存在者として想定されており、そこに不整合はないと主張できる。だが、仮に普遍者を拒否する理由がその不可解な特徴のゆえであるとしたら、トロープ唯名論が普遍者实在論より優位とはいえない。トロープ唯名論もさほど変わらない不可解さを備えているからである。

5. 総括

これまで性質の理論として、普遍者実在論、クラス唯名論、トロープ唯名論の三つの立場を概観してきた。手短にこれらの区別を振り返ろう。性質をその担い手である個体に共通する特徴を与える特別な存在者とみなす場合は普遍者実在論に、普遍者の存在を否定する場合は唯名論に立場が分かれる。さらに、唯名論の中でも、性質を対象の集まりであるクラスとみなすクラス唯名論と、対象の個別的な部分であり抽象的なトロープとみなすトロープ唯名論とに分かれる。

各理論にそれぞれの問題点も指摘された。普遍者実在論やトロープ唯名論には、普遍者やトロープといった存在者に不可解さが残る。クラス唯名論を採用した場合は、必然的に共外延的な性質が区別できないという問題が生じる。またトロープ唯名論を採用し、かつトロープを基礎的存在者とみなす場合、悪循環に陥ってしまう。ただし、不可解な特徴をもつという問題点は、その理論が直ちに放棄されるべき理由とはいえない。

最後に各理論のもつそれぞれの利点をまとめよう。普遍者実在論は、複数の個体をもつ性質は同一であるという素朴で直観的な性質理解を説明できる。複数の個体に例化される普遍者は厳密に同一のものだからである。トロープ唯名論は、対象がさまざまな性質から構成されるという直観を容易に説明できる。トロープとは抽象的な個体であり、プラトンやコーヒーカップといった日常の対象はその和だからである。一方、クラス唯名論はこうした直観理解を救い出すというよりも、否定的性質や選言的性質などの膨大な数の性質が存在することを引き受けることで、任意の述語の意味論的値を提供できるという強みがある。どの理論の不可解さを引き受け、何の説明を優先するか、あるいは別の新たな理論の可能性を模索するかは、それぞれの哲学者の判断に委ねられる。

註

(1) 「外見上」という但し書きがある理由は2.2節を参照のこと。また、本稿では「同じ」という語を、厳密な同一性と区別して、あえて日常の緩やかな意味で使用する。両者の違いを簡単に述べると、同一のものならば全ての性質を共有するという同一者不可識別の原理が成立するが、同じであるのにそのような厳密さは要請されないものとする。というのも「プラトンとアリストテレスは同じ人間だ」というときの「同じ」が同一性を意味すると、後述するトロープ唯名論にとって許容し難い表現となるためである。トロープ唯名論では、プラトンがもつ人間であるという性質とアリストテレスが人間であるという性質は数的に異なる個別的対象とされ、同一なものではない。

(2) 便宜上ここではLewis(1983)における「ムーア的事実」の意味に従ったが、この語が何を意味するかは必ずしも定かではない。ルイス自身も、先の論文ではムーア的事実を存在論的な観点から、客観的な類似性関係の成立する事態とみなしているが、その一方、これを日常的にわれわれが知っている事実(cf. Lewis, 1996, p. 549)として認識論的に理解する場合もある。

(3) 「普遍論争」が論じられる20世紀以降の分析形而上学は、A.J.エイヤーが攻撃した形而上学のように「常識や科学の世界を超越した実在」(Ayer, 1946, p. 33)について語ろうとするものとは趣を異にする。本稿で言

及する性質の理論を構築する哲学者達の特徴の一つは経験的に確認されている事象を自分の理論によって説明すべきものとする点にある(cf. Armstrong, 1978b, p. 19, Williams, 1953, p. 3)。彼らは、かつて批判の対象となった形而上学を実践しているのではなく、むしろ、自身の理論が経験的に知られる世界と調和することを強調する。

(4) 本稿では「实在論」を普遍者という存在者の種類を認める立場、「唯名論」はその存在を否定する立場という意味で用いており、それ以外の含みはない。ただし、普遍者の存在だけでなく、抽象的对象の存在を拒否する立場もまた唯名論と呼ばれることがある。特にクラス唯名論を採用し抽象的对象の存在にコミットするW. V. O. クワインの態度については柏端(2002)が詳しい。

(5) Ramsey(1925)はそもそも個体と普遍者の間に区別があることに反対する。

(6) 普遍者を、物理的对象とは違う世界にある対象とみなしつつその実在を主張した論者には一時期のB. ラッセルが挙げられる(cf. Russell, 1912, chap. IX)。またその実在を主張しなくとも、普遍者が抽象的であるのに対し、個体は具体的に考えられる傾向にあることはWilliams(1953)でも述べられている。

(7) これは文法あるいは論理的区別に基づく個体と性質の区別を完全に拒絶し、あくまで存在論的に性質を探究する姿勢を示している。文法的区別による最も単純なものは、文の中で主語として登場する語の指示対象が個体、述語のそれが性質であるとする。

(8) この他、性質Pに対応するクラスの成員のあいだには類似性が成り立つと考える類似性唯名論があり、Rodriguez-Pereyra(2002)で現代的なバージョンが提唱されている。

(9) これら三つの役割のうち(a)質的類似性および(b)因果的力に寄与すること(cf. Armstrong, 1978b, pp. 43-45) はアームストロングが普遍者に担わせた役割とほぼ同様である。

(10) 必然的に共外延的な性質に対して、クラス唯名論の中では両者を異なる性質ではなく同一の性質とみなす方針もありうるが、その違いを統語論上の差異として扱う試み(cf. Lewis, 1986, pp. 56-57)もある。

(11) トロープの個別性は、出来事のあいだの因果関係を分析する際や心的性質を考慮する際に有用とみなされることがある。たとえば、ケーブルの脆弱さがその橋が壊れた原因となるケースである。特定の橋の崩壊は特定のケーブルの脆弱さによって引き起こされたのであって、脆弱さ一般によって引き起こされるのではないと考える(cf. Campbell, 1997, pp. 128-130)。また、痛みのような心的性質がその人固有のものであるという考えはそれらがトロープとみなされている(cf. Williams, 1953, p. 18)と理解することもできる。

(12) この無限後退はトロープ唯名論固有のものではなく、類似性からムーア的事実を分析しようとすれば普遍者实在論でもクラス唯名論でも成立する。普遍者实在論の場合は普遍者のあいだの類似性について、クラス唯名論の場合はクラスの成員のあいだの類似性について同様の無限後退が生じる。

文献

- Armstrong, D. M. (1978a). *Nominalism and Realism*, Cambridge: Cambridge University Press.
 ——— (1978b). *A Theory of Universals*, Cambridge: Cambridge University Press.
 ——— (1989). *Universals: An Opinionated Introduction*. Colorado: Westview Press. 2nd ed.
 Ayer, A. J. (1946). *Language, Truth and Logic*. London: V. Gollancz.
 Campbell, K. (1981). 'The Metaphysics of Abstract Particulars', in D. H. Mellor and A. Oliver (Eds.), *Properties*, (1997, pp.126-139), Oxford: Oxford University Press.
 Daly, C. (1997). 'Tropes', in D. H. Mellor and A. Oliver (Eds.), *Properties*, (1997, pp.140-159), Oxford: Oxford University Press.
 柏端達也 (2002). 「クワインの唯名論について」, 『科学哲学』, 第35巻第2号, 41-54頁.
 Lewis, D. (1983). 'New Work for a Theory of Universals', *Australasian Journal of Philosophy*, 61(4), 343-377.
 ——— (1984). 'Putnam's Paradox', *Australasian Journal of Philosophy*, 62(3), 221-236.
 ——— (1986). *On the Plurality of Worlds*. Oxford: Oxford University Press.
 ——— (1996). 'Elusive Knowledge', *Australasian Journal of Philosophy*, 74(4), 549-567.
 Ramsey, F. P. (1925). 'Universals', in D.H. Mellor (Ed.), *Philosophical Papers*, (1990, pp.8-30), Cambridge: Cambridge University Press.
 Quine, W. V. O. (1967). 'On What There is', in *From a Logical Point of View* (pp.1-19), Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 2nd ed. revised.
 Rodriguez-Pereyra, G. (2002). *Resemblance Nominalism: A Solution to the Problem of Universals*. Oxford: Oxford University Press.

Russell, B. (1912). *The Problems of Philosophy*. London : Williams and Norgate.

Williams, D. C. (1953). 'On the Elements of Being: I', *The Review of Metaphysics*, 7(1), 3-18.

〔北海道大学大学院博士後期課程・哲学〕